「ＶダケＶ」におけるダケの諸用法について

張　　培

０．はじめに

動詞は事物の動作、作用、状態、存在などを表す品詞である。ダケが動詞（句）に接続する場合、必ずしもその動作、作用、状態、存在などを修飾するわけではない。

（１）食べるだけ取ってください。

（２）食べるだけ食べて、誰とも話さない。

（１）の「食べるだけ」は「取るもの」の「量」を表すもので、「ダケ」は「食べる量」の範囲を示し、その量をはかるものである。このようなダケは先行研究において、程度用法やいわゆる形式副詞などと位置づけられてきた。一方、（２）の「食べるだけ」のダケは「食べる」という動作を限定し、同時に「話す」という動作を否定する意味的な機能を持つ、いわゆるとりたて用法とされるものである。また、異なる立場の研究として、（２）のように、同一文中で同じ動詞が繰り返される表現「ＶダケＶ」を慣用的な表現とする先行研究（野呂2008など）もある。

以上のように、従来の研究では、動詞（句）に接続するダケについて異なる用法・カテゴリーにわけた上で、異なる観点から分析を行うことが多い。ダケのそれぞれの文法機能も充分に説明できるが、同じ形態素ダケとしてなぜ多様な用法を持っているのか、また（１）（２）のように、ダケが同じ動詞「食べる」に下接しながら、表わす意味が異なるのはなぜか、といった現象面の説明については、統一的な観点からの分析も求められる。本稿の筆者は張（2010）において、ダケに先行する語（句）を〈対象要素〉とし、これと集合をなす〈他の要素〉との関係という観点から、ダケのすべての用法の分化条件やその関連性を分析した。ダケの用法の分化を、ダケに上接する先行語（句）の意味特徴によって派生した結果とみるものである。

本稿では、同様の観点に基づいて、張（2010）では詳細に考察しなかった『動詞

（句）＋ダケ」の場合、特に「動詞（句）＋ダケ＋動詞（句）」という形式に注目する。ダケの前後が異なる動詞の場合を「Ｖ１ダケＶ２」とし、張（2010）の枠組によって考察した上で、同じ動詞で構成され慣用的な表現とされる「Ｖ１ダケＶ１」に対しても、同じ観点からの分析を試みる。先行研究では、「Ｖ１ダケＶ１」の意味は「主体がＶする限度までＶし続ける」と記述されているが、本稿では、従来の分析に加え、自然現象など無意志動詞の場合における「Ｖ１ダケＶ１」の様相も考察する。つまり、「Ｖ１ダケＶ１」という表現の多様性については、意志を表す動詞か否かによって、整合的な分析が提示できることを述べることになる。

１．〈対象要素〉と〈他の要素〉との関係

張（2010）では、ダケに上接する語（句）を品詞ごとに分け、それぞれダケに上接する〈対象要素〉と〈他の要素〉の関係を精査した上で、〈範列的な関係〉〈対立的な関係〉〈序列的な関係〉〈包含的な関係〉〈不定的な関係〉に分類し、その関係に基づいて、ダケの用法を〈個体指定用法〉〈範囲指定用法〉〈範囲提示用法〉の三つに分けている。その三つの用法はダケに上接する〈対象要素〉の性質によって分化したものと考えられ、ダケの本質は一貫して「〈対象要素〉の境界線を示す」と一般化できることも説明している。

張（2010）では、「動詞（句）＋ダケ」について、慣用的な表現「Ｖ可能形ダケＶ」「ＶタイダケＶ」「ＶダケＶ」なども含め、動詞（句）に上接するダケの用法も対象としたが、詳細な説明には至らなかった。本稿は張（2010）を補充するものの一つとして、「ＶダケＶ」を更に「Ｖ１ダケＶ２」と「Ｖ１ダケＶ１」にわけて、ダケの用法を考察する。

本論に入る前に、まず張（2010）におけるダケの用法の分化条件について概観する。

１．１〈個体指定用法〉

張（2010）では、ダケに上接する〈対象要素〉が独立した「個体」として捉えられる場合、ダケを〈個体指定用法〉と定義している。この場合、〈集合〉における要素間の関係は対等・均質で、独立して分布する〈範列的な関係〉である。あるいは、〈集合〉の中に二要素しかない場合、二要素が強い対比性を持つならば、〈対象

要素〉と〈他の要素〉は〈対立的な関係〉となる。また、〈個体指定用法〉であるダケは〈対象要素〉を指定すると同時に、〈他の要素〉に対する排他的な意味も派生しやすいと述べている。

次はそれぞれ（3）〈範列的な関係〉と（4）〈対立的な関係〉の例である。[注1]

（3）疲れたのよ。休みたいの。――眠るだけが休みじゃないわ。

（4）すると、あの空のにごりは、穴の内側だけの現象だったのだろうか？

1．2〈範囲指定用法〉

張（2010）では、ダケに上接する要素が「ある段階の事態」や「確定できる数・量」である場合、ダケを〈範囲指定用法〉と定義している。この場合、〈対象要素〉と〈他の要素〉には一定の順序があり、段階的な序列をなす〈序列的な関係〉や、〈対象要素〉の範囲が〈他の要素〉の範囲に含まれる〈包含的な関係〉である。ダケが〈範囲指定用法〉であるとき、客観的に〈対象要素〉の数・量やある段階の範囲までを指定することが特徴であると説明している。

次はそれぞれ（5）〈序列的な関係〉と（6）〈包含的な関係〉の例である。

（5）特に食事のとき、はしを右手で茶碗を左手でもつことと、右手で鉛筆をもつことだけは訓練するのが親の義務のように考えられていた。

（6）だから五日間だけ、つきあってもらえないかな。

1．3〈範囲提示用法〉

張（2010）では、ダケに上接する〈対象要素〉が「確定できない量・程度」または「無限大の量・程度」を表す場合、ダケは〈範囲提示用法〉であると定義している。この場合、〈対象要素〉の範囲が客観的・絶対的な数値・数量では把握できないため、〈対象要素〉と〈他の要素〉が〈不定的な関係〉になると述べている。

（7）は「(無限）大の量」を表し、（8）は「少ない量」を表すが、ここでは、大・小とは関係せず、〈対象要素〉の範囲が確定できなければ、〈他の要素〉との関係は〈不定的な関係〉になる。この場合、限定や指定を行うことができないため、ダケはおおよその範囲を提示するものであると捉えられる。

（7）その方がどれだけせいせいするか分りません。

（8）お薬は食後だそうです、少しだけでも食べなさい。

2．考察

本稿の分析対象として、『新潮文庫の100冊』および「小松左京コーパス」のテキストデータから「ＶダケＶ」の用例を採取する。ここで取り扱う対象Ｖは、動詞基本形のほか、動詞可能形、動詞タイ形、テイル形など、動詞句も含む。まず「Ｖ１ダケＶ２」と「Ｖ１ダケＶ１」にわけて、それぞれの特徴を詳細に見る。

2．1「V1ダケV2」

「Ｖ１ダケＶ２」は699例あり、「ＶダケＶ」の836例中、83.6%を占めている。それぞれの形態の分布を次の表１に示す。

表１　「Ｖ１ダケＶ２」例の分布（単位：例）

「Ｖ１ダケＶ２」		新潮文庫の100冊	小松左京コーパス	合計
可能形	デキル	359	300	659
	レル・ラレル	4	1	5
基本形		18	8	26
動詞句	タ形	5	0	5
	テイル形	2	1	3
	タイ形	1	0	1
合　計		389	310	699

表１からわかるように、「できるだけ」の例が最も多く見られる。(注2)

（9）そのパターンを、できるだけ拡大して、“スペース・アロー”の場合と比較してみてくれ。　（さよ）

（9）のダケは「できる」に下接し、「最大限の能力・可能性」の範囲を示している。また、「最大限の能力・可能性」は客観的・絶対的な数値・数量では確定できないため、〈対象要素〉と〈他の要素〉が〈不定的な関係〉になる。よって、（9）のダケは〈範囲提示用法〉と考えられる。

（10）見送りの人たちと別れを惜しむ間もなく、あわただしく乗機。免税店で酒はパスして、とにかく「マイルドセブン」を持てるだけ買いこむ。（黄河）

（10）のダケは「持っている最大の量」を表す。同様に「最大の量」も「最大限」と捉えられ、確定的にはかること、すなわち限定・指示することができない。従って、（10）(注3) のダケも〈範囲提示用法〉とする。

更に、(11) も同様に考えられる。「やりたい」は希望・欲求を表す。ダケが「やりたい」に下接する場合、「希望の最大限」を示している。〈対象要素〉の範囲が確定できないため、〈他の要素〉との関係も〈不定的な関係〉になる。このダケは〈範囲提示用法〉と考えられる。

(11) すべて吟子の一存でやりたいだけ自由に勉強することができる。(花埋)

以上の〈範囲提示用法〉のうち、(9) (11) の「できるだけ」「やりたいだけ」は副詞句として、それぞれ後ろの「拡大する」「自由に勉強する」を修飾する。この場合、「V1ダケ」は「V2」の最大の程度をはかって示している。すなわち、「V1ダケ」は「V2」の事態量の程度を表す。この場合、「V1ダケ」と「V2」の間には、格助詞などの挿入が見られないが、これは「V1ダケ」と「V2」に格関係がないためと考えられる。一方、(10) の「持てるだけ」は「買いこむ」の量を表し、すなわち「V1ダケ」はV2の目的語の量をはかっている。この場合「持てるだけ」は数量名詞の役割も果たしている。

次に、V1が基本形の例を見てみる。

最も多いのは、(12) (13) のように、V2の目的語の量・範囲を示すものである。

(12) 眼についたものをあるだけ持ってこられたのでしょう。 (糸遊)

(13) トーマス・アキナスなんて、食い過ぎて、自分の机の前が、腹を入れるだけくりぬいてあったというんです。 (性と)

ここでは、(12)「眼についたもの」の「ある」という事態、(13)「腹」の「入れる」という事態（の範囲）が〈対象要素〉となる。ダケは〈集合〉の中の、〈対象要素〉の範囲を示している。この場合、〈対象要素〉と〈他の要素〉が〈包含的な関係〉になる。また、(12) (13) の文脈において、「眼についたもの」や「腹」はすでに存在する事物であるため、〈対象要素〉の範囲は確定できる範囲と考えられる。よって、これらのダケは〈対象要素〉の範囲まで指定し、〈範囲指定用法〉となる。

また、(12) (13) の「眼についたものをあるだけ」「腹を入れるだけ」はそれぞれ後ろの「持ってこられた」「くりぬいてあった」という動作の量を表わす。すなわち、「V1ダケ」によってV2の量をはかって、V2という動作の目的語の量を表す。この場合、「V1ダケ」と「V2」の間には格関係があり、「を」「が」など

の格助詞を挿入することもできる。(注4)

(12)(13)は構文的に見ると、「Ｖ１＋ダケ」とＶ２は「項」と述語の関係である。逆に考えると、「Ｖ１＋ダケ」とＶ２は「項」と述語の関係であるからこそ、必ず同じ動詞である必要がない。また、「Ｖ１ダケＶ２」の場合、収集した実例を見る限り、Ｖ１には意志動詞、状態動詞、可能動詞などがあり、動詞の制限がないが、Ｖ２が無意志動詞の例は見られない。

また、「Ｖ１ダケ」がＶ２の事態量をはかる例もある。(14)の「たんのうするだけ」は「しゃべりなさい」の程度を表し、ダケは「たんのうする」の程度をはかる。このようなダケも〈範囲指定用法〉と考えられる。

(14) ふたりで先生をはさんで、たんのうするだけしゃべりなさい。あとはめいめいかってにすわって。 (二十)

一方、(15)のように、〈集合〉「許してもらったこと」の中に、〈対象要素〉「さよならを言う」と範列的な関係を持つ、例えば「(ほかの友達に)会いに行く」「ゆっくり話をする」「一緒にお茶を飲む」などの〈他の要素〉が想定できる例もある。この場合のダケは〈個体指定用法〉と考えられる。

(15) あたし、さんざんせがんでやっとここへきて、あんたにさよならを言うだけ許してもらったのよ。 (赤毛)

以上のように、「Ｖ１ダケＶ２」の用例においては、「できるだけ」の例が最も多く見られる。Ｖ１が可能動詞である場合、「Ｖ１ダケ」は最大限の程度または最大限の量を表すことによって、ダケの対象要素の範囲が確定できない。〈対象要素〉と〈他の要素〉は〈不定的な関係〉になる。このようなダケは〈範囲提示用法〉と考えられる。これが「ＶダケＶ」の中心的な用法といえる。Ｖ１が基本形・動詞句である場合には、「Ｖ１ダケ」が確定できる量・程度を表すため、ダケは〈範囲指定用法〉を示し、更に、用例数が少ないものの〈対象要素〉と〈他の要素〉が〈範列的な関係〉を持ち〈個体指定用法〉示す例も観察できる。ダケは動詞句に接続して、主に〈範囲提示用法〉を示すが、〈対象要素〉としてのＶが文脈上どのような〈他の要素〉と集合関係を持つかによって、多様な用法を示しうることがわかる。

２．２「Ｖ１ダケＶ１」

つぎに、「Ｖ１ダケＶ１」の様相をみていく。『新潮文庫の100冊』および「小松

左京コーパス」のテキストデータにおける用例の分布を全体的に確認する。

表２から分かるように、「Ｖ１ダケＶ１」の場合、Ｖ１も基本形のほか、可能形、タイ形、セル・サセル形[注5]などが観察できる。

表２　「Ｖ１ダケＶ１」の例の分布（単位：例）

「Ｖ１ダケＶ２」	新潮文庫の100冊	小松左京コーパス	合計
基本形	27	32	59
可能形	37	22	59
タイ形	11	5	16
サセル	3	0	3
合計	78	59	137

２．２．１　先行研究

ダケの前後が同一の動詞である場合、「Ｖ１ダケＶ1」を慣用的な表現とする先行研究が多い。グループ・ジャマシイ（1998）では「そのこと以外の他のするべきことをしない」と説明している。また、森田（1989）では、「可能なかぎり～する」と解釈している。

（16）彼女は文句を言うだけ言って何も手伝ってくれない。

（17）彼は飲むだけ飲んで会費を払わずに帰ってしまった。

（18）今どうしているか様子がわからないから、手紙を出すだけ出して返事を待とう。

しかし、野呂（2008）では、(16)～(18) の例に対し、以下のように指摘している。[注6]

(16) (17) では、当該事態が繰り返されているという読みができるのに対し、(18) では、「手紙を出す」のは一回だけという読みの方が普通であろう。したがって、森田（1989）の記述は、(16) (17) に当てはまるが、(18) においては妥当ではない。一方、グループ・ジャマシイ（1998）の「他のするべきことをしない」という記述は、(16) (17) においては後に続く文からもたらされると考えるべきであり、「Ｖ１ダケＶ１」の記述に含めるべきではない。(野呂2008：p.146)

以上の問題点を踏まえ、野呂（2008）では、次の（19）（20）を挙げ、「一回の動作」と「事態が継続する限度を表している」の違いを述べた上で、「Ｖ１ダケＶ１」を二つの用法にわけている。①のダケを限定用法、②のダケを程度用法と述べてい

る。

①：Ｖが表す行為のみを行い、話者が期待する事態を伴わない。

②：主体がＶする限度までＶし続ける。

(19) 一応リストアップだけはしましたが、きちんと精査していないもので、全部もう一度精査して次回出そうかと思いましたが、出すだけ出させていただきます。

(20) お腹を壊した時は「出ないよりまし」と、特に気にしない。充分な水分の補給と、常にトイレの位置の確認だけを怠らないようにし、出すだけ出した後、薬を飲むようにしている。

確かに、野呂（2008）で指摘されるように、(19) では、「リストアップしたもの」を「出す」のはおそらく一回であるのに対し、(20) では、可能なかぎり（何度でも）「出す」と解釈できる。また、この二つの文には、統語的な違いもある。(19) には副助詞「は」が挿入可能なのに対し、(20) では挿入できない。筆者もこの考察に賛同する。

ただし、野呂（2008）では①に対し、「Ｖが表す行為のみを行い」という動作が一回であるかどうかは明確に説明していない。むしろ、動作が「一回」であろうが、「複数回繰り返す」であろうが、ダケがこの動作を限定することに変わりはないだろう。例えば (16) (17) の「言うだけ言って」「飲むだけ飲んで」でも、「相当時間以内で、何回もこの動作を繰り返し、継続している」という解釈ができ、一回の動作ではないが、ダケは「言う」「飲む」という動作を限定し、「手伝ってくれる」「会費を払う」などの〈他の要素〉を排除する。

また、②「主体がＶする限度までＶし続ける」について、この「限度」が「有限（大）」なのか、「無限（大）」なのか不明確である。

例えば、(20) の「出すだけ出した後」は「最大限、出す」という意味を表す。この「最大限」は「限界点」があるタイプと考えられる。つまり、この場合、ダケの〈対象要素〉の範囲を決めることができ、本稿では、これを〈範囲指定用法〉とする。

一方、(21) の「冷えこむだけ冷えこんで」は「最大限まで冷えこむ」の意味を表す。「冷えこむ」は無意志動詞で、一定時間、継続的にこのような状態が続いている。この「冷えこむ」はひとつの自然現象で、人の意志ではコントロールできな

い動作・事態である。よって、「冷えこむ」の「最大限」には「限界点」が無限大と考える。(21) のダケは〈対象要素〉の確定できない範囲をはかるものといえ、本稿の枠組では〈範囲提示用法〉となる。

(21) 気候とは裏腹に、世間の景気は長期不況とやらで、すでに夏すぎから冷えこむだけ冷えこんで、デパートや商店の、クリスマス、お歳暮大売り出しも、忘年会客のにぎわいも、今年はとりわけ精彩を欠くが、それでも新年を間近にひかえて、ショーウインドウから通りへあふれる光や雑踏の動きに、いつもとちがった、華やいだ活気があふれ出しつつあった。 (乗合)

以上の (20) (21) はともに野呂 (2008) の用法②に当てはまるが、(21) には「話者の期待される事態を伴わない」ニュアンスはない。(20) の「出すだけ出した後」は人の意志で支配される動作で、一定の時間において継続しているが、「限界点」がある。一方、(21) の「冷えこむ」は無意志動詞で、無限大に「冷えこむ」。このような自然現象の場合、「限界点」がないと考えられる。つまり、(21) は「無限大」あるいは「把握できない無限大の程度で進行している」意味を表す。この違いは、野呂 (2008) の①②では区別できない。

以上の問題点を踏まえ、以下では、主にＶ１が意志を表す動詞なのか、意志でコントロールできない無意志動詞もしくは感情動詞なのかにわけて、「Ｖ１ダケＶ１」の用法を明確にしたい。

２．２．２　意志を表す動詞の「Ｖ１ダケＶ１」

ここでは、「Ｖ１ダケＶ１」におけるＶ１が「一回の動作」か「継続的動作」かを区別せず、〈集合〉の観点から概観する。

まず、先行研究であげられた (17) を分析してみる。

(17) の〈集合〉の中には、〈対象要素〉「飲む」のほかに、「食べる」「友達と話す」「会費を支払う」など〈他の要素〉も想定できる。〈対象要素〉と〈他の要素〉が〈範列的な関係〉になる。〈対象要素〉は独立した一個体として捉えられるため、このダケは〈個体指定用法〉と考えられる。

(17) 彼は飲むだけ飲んで会費を払わずに帰ってしまった。 (再掲)

また、文脈上、〈対象要素〉と〈他の要素〉が強い対比性を持つため、ダケは

〈対象要素〉「飲む」のみを指定し、〈他の要素〉「会費を支払う」に対する排他的な意味も含んでいる。更に（17）には「するべきことをしない」の解釈もできるが、おそらく、これは〈対象要素〉「飲む」と〈他の要素〉「会費を払う」などの強い対比性によるもので、ダケ自体の意味機能によるものではないと考える。

（22）の「やるだけ」は、ある事態が完成する、または成功するために、最後の結果も含めて、いくつかの段階があるが、結果がどうなるかは別として、とりあえずある段階まで達成すればよい、という意味を示す。

（22）「通信機はありますが……出力が弱いし、それにだいぶあちこちぶつけたり、ぬれたりしていますから……」片岡はぐったりと岩に腰を下ろしながら、肩を落としていった。
「まあとにかく、やるだけやってみます」（日本）

（22）では、〈対象要素〉が「やる」、〈他の要素〉が例えば、「業者を頼んで、修理する」「新しいのを買う」などが想定できる。このように、事態１（〈対象要素〉）と事態２、事態３…（〈他の要素〉）は、範列的に〈集合〉の中に存在するのではなく、一定の順序で発生し、幾つかの段階を持つ〈序列的な関係〉であると考えられる。このダケは集合内の〈他の要素〉に含まれる〈対象要素〉の範囲までを指定する〈範囲指定用法〉である。また、〈対象要素〉と〈他の要素〉が表す事態の序列が文脈の意味や一般知識によって、すでに決められているため、範列的な関係ではない。したがって、相互に対立する関係とはならないだろう。よって、この場合、排他性は生じにくいと考える。

このようなダケは以下のような命令文や条件文にもよく表れる。

（23）ちょっと見るだけ見てくださいよ。（逃げ）

（24）とるだけとったら、踊りながらさっさとずらかっちまったんだから、別に歴史に対する決定的な干渉には……（とり）

（22）～（24）のように、文脈の意味によって、〈対象要素〉と〈他の要素〉に一定の順序づけがある場合、〈序列的な関係〉になる。このダケは〈対象要素〉の段階まで指定する〈範囲指定用法〉と捉えられる。しかし、〈対象要素〉は量のようなものではなく、ある事態を表している。野呂（2008）では、一回の動作を表す「Ｖ１ダケＶ１」では、「は」の挿入が容認できると指摘している。本稿では、「一回の動作」というより、一つの事態として考える。（17）の「飲むだけ飲んで」の

「飲む」も同様に一つの事態と考えられる。「飲むだけは飲んで」「やるだけはやる」のように、「は」の挿入が可能なのは、この用法において、「飲むこと」「やること」が「こと」（事態）そのものとしてとらえられているためだと考えられる。

次に（25）の〈対象要素〉と〈他の要素〉の関係を見てみよう。

（25）の「曲げるだけ曲げて」は「曲げる」という動作を「最大限までする」という意味を表す。文脈によって、「曲げる」は意志的に支配できる動作であるため、「曲げるだけ曲げて」には「最大限」の「限界点」が存在すると考えられる。

（25）白衣の身を曲げるだけ曲げて、頭を膝の間に擁して、両袖で顔を覆うて、うずくまっているのである。（金閣）

つまり、（25）の〈対象要素〉は「有限」である「最大限の程度」を表す。〈対象要素〉と〈他の要素〉が〈包含的な関係〉になる。ダケは〈対象要素〉の範囲を指定する〈範囲指定用法〉と考えられる。

以上、「Ｖ１ダケＶ１」についてダケに上接するＶ１が基本形である場合の用例を考察した。ダケの〈対象要素〉Ｖ１は、〈他の要素〉と〈範列的な関係〉を持つ「一つの動作」にもなり、〈他の要素〉と〈序列的な関係〉を持つ「或る段階にある一つの事態」にも、また、〈他の要素〉と〈包含的な関係〉を持つ「有限大の程度」を表す場合もある。つまり、ダケに上接するＶ１は、同様に基本形であっても、どの用法となるかは、〈対象要素〉と〈他の要素〉の関係によって規定されているといえる。

２．２．３　無意志を表す動詞の「Ｖ１ダケＶ１」

次に、自然現象などを表す無意志動詞の場合を見ていく。（26）（27）のＶ１「燃える」「痩せる」はすべて、自然現象或いは人の意志でコントロールできない無意志動詞である。この場合、「燃えるだけ燃えて」「痩せるだけ痩せた」は「一定期間ある動作が続くことによって、その程度が進展する」ことを表す。

（26）今の所、黒煙はうすく、大した事はなさそうに見える。木造住宅の密集地か何かで、おそらく、突然無人となって追突、衝突した車から発生延焼し、もう燃えるだけ燃えて、おさまりかけている火災だった。（こち）

（26）のダケは「燃える」の最大程度を表す。「燃える」は変化動詞であり、「燃えるだけ燃える」は最大限の限界点ではあるが、自然現象であるため、その限界点

は確定できない。または無限大ともいえる。そのため、「最大限の限界点」とは区別して、最大程度とする。この最大程度は確定できないものであるため、〈対象要素〉と〈他の要素〉は〈不定的な関係〉である。従って、このダケは〈範囲提示用法〉と考えられる。また、自然現象なので、「他のやるべきことをしない」というニュアンスを伴わない。(27) も同様に説明できる。

(27) この痩せるだけ痩せた土地に、十四年前「大統領にたのまれて」、悪戦苦闘、ブラジリアのごみをすきこみ、一メートルもほりかえして、何キロもの肥料を入れ、外から土をはこびこみ、雑草の種をはこびこみ、みみずから土壌細菌まで「移植」して、すってんてんになりながら、ついにすばらしい果樹と花ができるようにしたのは、大野山さんという、二世ではないが、但馬の人である。 (二十)

また、(28) のようなＶ１が可能動詞の場合も、「逃げられる」の程度が「無限大」になるため、ダケは〈範囲提示用法〉と考えられる。

(28) 同じような運命の淵に立った二人、今度こそしっかり手をとりあって、それぞれの恐ろしい追手の爪先から、逃げられるだけ逃げてみよう。 (あや)

更に、感情動詞や「～たい」の場合も同様に説明できる。(29) の「泣く」は意志的にコントロールできない動作である。文脈上、「泣きやむ」という「限界点」があるが、「泣く」時間や程度などの限界は把握できない。このダケも〈範囲提示用法〉となる。(30) の「飲みたい」は意志を表すが、「どのぐらいの量を飲む」か「飲む時間」なども確定できないため、同様に解釈できる。

(29) アンは泣くだけ泣いてしまって、しょんぼり窓べにすわっていた。 (赤毛)

(30) きょうはビールはみんな飲みたいだけ飲んでもいい、全部自分がひとりで払うから、ともいった。 (車輪)

このように、Ｖ１が無意志動詞・感情動詞・可能動詞などである場合、「Ｖ１ダケＶ１」の「Ｖ１ダケ」は「無限大の程度・量」を表すことがわかる。つまり、ダケによって提示される〈対象要素〉の範囲が無限大になるといえる。これは2.2.2節 (25) のように、Ｖ１が意志動詞の場合、「Ｖ１ダケ」が「限界点のある最大程度・量」を表すこととは異なる。この二つの用法は、野呂 (2008) の②「主体がＶ

する限度までＶし続ける」に当たるが、「期待される事態」の有無を説明しうるものである。

2．3　まとめ

以上では、「Ｖ１ダケＶ２」「Ｖ１ダケＶ１」の用例について、〈集合〉の観点から分析を試みた。類型の用法の分布を表３にまとめる。

表３

	個体指定用法	範囲指定用法	範囲提示用法
「V1ダケV2」	9	25	665
「V1ダケV1」	6	46	85
合計	15	71	750

表３からわかるように、「ＶダケＶ」の場合、〈範囲提示用法〉の例が多く見られる。そのうち、「できるだけ」の例が大半を占めることも、注目すべきである。張(2010) によると、「名詞＋ダケ」の場合、〈個体指定用法〉が圧倒的に多く、これと比べ、動詞の場合、「できるだけ」の例で〈範囲提示用法〉を担うことは、「動詞＋ダケ」の一つの役割分担と考えられる。また、張（2011）によると、「数量詞＋ダケ」の場合、ダケは〈範囲指定用法〉の例が数多く見られる。このように、ダケは一形態素として、各品詞に接続することで用法を分化させ、ダケのそれぞれの役割分担をしていると見ることができる。

3．おわりに

本稿はダケが動詞（句）に下接する場合、特に「ＶダケＶ」におけるダケの用法について記述考察を行ったものである。

まず、ダケの前後が異なる動詞である「Ｖ１ダケＶ２」と、ダケの前後が同じ動詞である「Ｖ１ダケＶ１」に分けて、それぞれの特徴を考察した。

「Ｖ１ダケＶ２」の場合、Ｖ１は可能動詞の例が８割を占める。「Ｖ１ダケ」はＶ２の「最大の程度」または「最大の量」を表す。ともに〈範囲提示用法〉と捉えられるが、統語的な異なりがある。「最大の程度」の場合、「Ｖ１ダケ」はＶ２の事態量を表し、副詞句として働くため格助詞の挿入ができないが、「最大の量」の場合、「Ｖ１ダケ」は項名詞の量を表してＶ２とは、項と述語の関係になりうる

ので、「を」「が」などの格助詞の挿入が認められる。また、Ｖ１が基本形の場合、「Ｖ１ダケ」は確定できる程度・量を表す場合が多い。〈対象要素〉と〈他の要素〉は〈包含的な関係〉になる。このようなダケは〈範囲指定用法〉と考えられる。この場合も、可能動詞と同様に「Ｖ１ダケ」が量を表す場合、目的語をはじめとした「項」と述語の格関係になりうるので、「を」などの挿入が容認できる。更に、Ｖ１がある動作またはある事態そのものを表す例もある。この場合、ダケは〈個体指定用法〉と捉えられ限定的な解釈が生じる。

一方、多くの先行研究において慣用表現とされてきた「Ｖ１ダケＶ１」の場合も、〈対象要素〉と〈他の要素〉の関係によって分析できる。Ｖ１がある事態そのものを表し、他の事態と〈範列的な関係〉をなす場合、ダケは限定的な解釈を示し、〈個体指定用法〉と考えられる。Ｖ１が「或る段階にある事態」を表す場合、ダケは〈序列的な関係〉をなし、〈範囲指定用法〉となる。以上の二用法では、ともにＶ１が一事態として捉えられるため、「Ｖ１ダケはＶ１」のように、「は」の挿入が容認できる。また、「Ｖ１ダケ」が「ある（事態の）程度・量」を表すとき、この程度・量が「限界のある最大程度・量」か「無限大の程度・量」かは、Ｖ１が意志動詞か無意志動詞かによって分けられる。「限界のある最大程度・量」の場合、ダケは〈範囲指定用法〉となり、「無限大の程度・量」の場合、ダケは〈範囲提示用法〉といえ、この把握によって、「期待される事態を伴わない」という含みの有無をも説明しうる。

ダケの用法分化は、動詞句に接続する場合でも、上接要素としての〈対象要素〉の性質と、〈他の要素〉との関係によって分化しており、ダケの意味は一貫して「境界の表示」であると考えることができる。

注

（１）以下の（３）～（８）は張（2010）の例を引用する。また番号は本稿での通し番号に改める。

（２）「Ｖ１ダケＶ２」のうち、Ｖ１が「できる」の割合は非常に高く、「できるだけ」という固定化・定型化した慣用表現とも考えられるが、本稿では、Ｖ１ダケＶ１を含め、いずれも慣用表現であることを前提としない立場から、「できる」が動詞であることを重視してＶ１ダケＶ２の一類型として本節で論じる。

（３）(10) の「持てる」は可能動詞として、一般に「最大限の可能性」を指すと捉えられ

る。すなわち「持つことができる最大の量」を表すことができる。しかし、文脈によっては、確定できる数量の特定も可能である。例えば、動作主が自分の持てる最大の量が10箱であると把握している場合、この「持てるだけ」は10箱を指すことができる。このように、ダケが示す〈対象要素〉の範囲が確定できる範囲の場合、ダケは〈範囲指定用法〉ともなりうる。これは本稿の論述とは矛盾しない。

（4）例えば、「野菜は、食べるだけをいれてシャキシャキなうちにたべたほうがおいしいです。」（野呂2008・例（25））

（5）例えば、「云えば気が晴れるかと思うて、云わせるだけ云わせて聞き役してましたけども、女二人の争いはこの家だけのことやない。」（華岡）

（6）（16）～（20）は野呂（2008）で挙げられる例である。（下線は引用者による。また番号は本稿での通し番号に改める。）

参考文献

奥津敬一郎（1986）「形式副詞」『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社

グループ・ジャマシイ（1998）『日本語文型辞典』くろしお出版

張　培（2010）「現代語ダケの諸用法―用法分化の条件と連続性」（『日本語学会2010年度秋季大会発表予稿集』日本語学会）

張　培（2011）「数量表現に関わるダケの用法について」（名古屋言語研究第５号　名古屋言語研究会）

丹羽哲也（1992）「副助詞における程度と取り立て」（『人文研究』44.13大阪市立大学文学部）

野呂健一（2008）「動詞の反復表現「ＶにＶ」「ＶダケＶ」「ＶばＶほど」について」（『日本語学会2008年度春季大会発表予稿集』日本語学会）

沼田善子（1986）「とりたて詞」『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社

半藤英明（1988）「現代語「だけ」の用法分類とその周辺」（『文学・語学』123）

半藤英明（1997）「「取り立て」から見た係助詞と副助詞」（『成蹊国文』31　成蹊大学国語国文学会）

森田良行（1972）「「だけ」「ばかり」の用法」（『早稲田大学語学教育研究所紀要10』）

森田良行（1989）『基礎日本語辞典』角川書店

森山卓郎（1999）『ここからはじまる日本語文法』ひつじ書房

資料（※本文中で用例の出典は下線部を省略として記入した。）

赤川次郎『女社長に乾杯！』／安部公房『砂の女』／開高健『パニック・裸の王様』／渡辺淳一『花埋み』／壺井栄『二十四の瞳』／三島由紀夫『金閣寺』／モンゴメリ『赤毛のアン』／有吉佐和子『華岡青洲の妻』／ヘルマン・ヘッセ『車輪の下』（以上は『新潮文庫の100冊（CD－ROM版）』より）

さよならシュピター／黄河――中国文明の旅／糸遊［かげろう］／性と悪をつなぐもの／乗合船夢幻通路／日本沈没／逃ける／とりなおし［リテイク］／こちらニッポン／二十二世紀の大国・ブラジル／あやつり心中（以上は「小松左京コーパス（総合研究大学大学院小松左京コーパス作成委員会作成）」より）

（ちょう・ばい／名古屋大学大学院博士課程後期）